

防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

2

2021

No.591



特集

- 塗布含浸材の可能性
- 多様化する高耐久防水の考え方

雨水管詰まりの原因は不適切な接続

鈴木 哲夫

(有)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役

マンションのバルコニーにおける雨水排水は、排水経路にできるだけ曲がりのない状態が好ましい。1階がエントランスなどのケースで、出入口の美観上の配慮からやむを得ず配管を振り回して無理が生じた場合、詰まりの原因になることがある。

今回の事例は、降雨の折に2階バルコニーが冠水した原因を探ったものである。写真1は、冠水したバルコニーの直下の配管接続状況である。内視鏡カメラで探ると、写真1の円内位置にゴミ溜まりが見つかり、上階縦樋の排水(A)が2階バルコニーの呼樋(C)に逆流して、水が噴き出す状態になったものと判明した。

縦樋の詰まり位置は、90°チーズ継手に無理やり穴を開けて、エントランス庇の雨水排水管(B)を差込み接続した状態であった。差込みによる管内の出っ張りが、ゴミを拾う原因になったと見られる。また、バルコニー縦樋(A)のエルボ返しは、写真2のように不適切接続の直下にもあり、階段状に連続して4ヵ所も存在した。図のように、B・Cの2系統の排水がそこに加わることで、排水障害が出やすい配管接続状態となっていたのである。

改善にあたっては、BおよびCの排水位置を下まで延長し、ずらして接続するとともに、縦樋(A)のエルボ返しを4ヵ所から3ヵ所に減らして対応することにした。それにしてもなぜ、このような配管接続になったのか。何かしら事情があったに違いない。

1階エントランスの庇は、本体工事の終盤に鉄骨下地で構築したもので、設計ではバルコニーの縦樋(A)に接続する予定はなかったという。売主関係者から、庇の縦樋を1階で見せたくないという強い要望が庇の取付工事中に出され、隠ぺいする排水ルートがないために、困った配管工が無理やり継手に穴を開けて接続したものと分かった。

解決策は、ほかにも考えられたのだろうが、工事の最終段階であったことから、完成させることが優先され、不適切な配管接続を選ばざるを得なかったようだ。やってはいけないことと理解していても、窮すれば何をするか分からないのが人間であり、そこまで追い詰められた状態だったと推察できる。

事例のようなトラブルは、事前の設計段階で十分な検討がなされていないことが主因となって発生したと言える。思い入れをもって美観上の処理を迫ることは悪いことではないが、身勝手な売主関係者は、要望を述べる上で、工事には時間的な制約があることをわきまえるべきであろう。

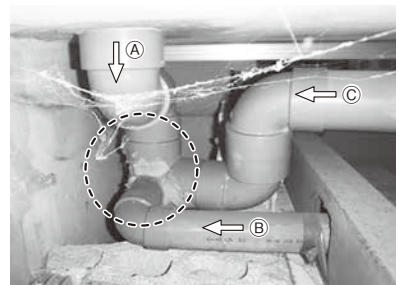


写真1 エルボ返しと不適切接続をした2階の縦樋下部の接続状況

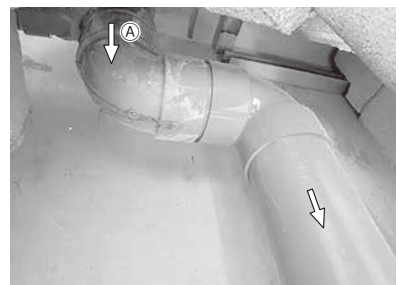


写真2 さらにエルボ返しのある不適切接続下部の縦樋

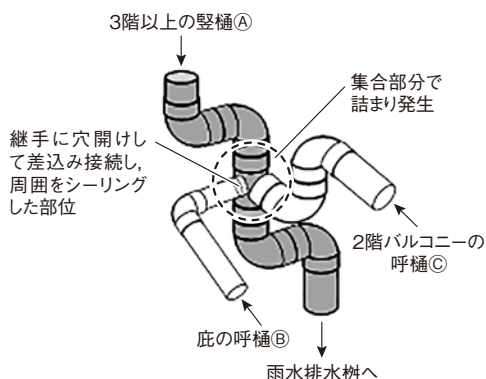


図 雨水排水の不適切接続と複雑な配管施工

(有)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役